

- 【出席率】 会員58名中46名
【先々週の出席率】 90. 20%
【ヴィジター】
三条北RCより 梨木建夫君
三条RCより 佐野勝榮君
米山奨学生 タキ・コフィ・アルフォンソ君
- 【先週のメイクアップ】
5/12 三条北RCへ 鈴木圀彦君
5/14 加茂RCへ 吉井正孝君 長谷川晴生君
野島廣一郎君 谷 晴夫君
5/15 吉田RCへ 野島廣一郎君



国際ロータリー会長 李 東 建 [韓 国]
第2560地区ガバナー 馬 場 信 彦 [三 条 南]
第4分区AG 古 井 辰 禱 [吉 田]
会 長 吉 井 正 孝
幹 事 鈴 木 圀 彦
S A A 野 中 悟

事務局
〒955-8666 三条市旭町2-5-10
三条信用金庫本店内
☎0256-35-3477 Fax 0256-32-7095
E-maile info@sanjo-minami.jp
URL <http://www.sanjo-minami.jp>

会長挨拶

吉井 正孝 会長

こんにちは。今日は三条北 RC から梨木さん、三条 RC から佐野さん、そして米山奨学生のタキ君、ようこそおいでくださいました。最後までごゆっくりお過ごしください。

さて先週 11 日は、GW あけの例会と言う事で、どうしても都合がつかず出張に出掛けてしまい、残念ながら私の年度初めての「欠席」をしてしまいました。佐藤会長エレクトには、理事会はじめ会長挨拶と、ご面倒をお掛け致しました。そして今週は鈴木幹事が「欠席」・・・。



実は鈴木幹事、娘さんの結婚式で新型インフルエンザの渦中にある「神戸」に、一家で出掛けておられます。何とか無事に帰条される事を願っておりますが・・・。

先週の例会時、出席委員長の西巻さんや鈴木幹事からも皆様にお願いがあったかと思いますが、本年度も残すところあと 1 ヶ月半。この間、今一步の「出席率向上」に向けてのお願いです。

ご承知の通り、当クラブの出席率は創立以来 40 年に亘り、常に 90%以上と言う抜群の出席率を維持して参りました。それが今年に入って少々低下傾向にある事が懸念されます。

特に今年度は当クラブから、馬場ガバナーを輩出しており、その意味からも、何とかこれまでの出席率はキープしておきたいと思っております。そこで改めてのお願いですが、所要での例会欠席は止むを得ないとしても、何とかメイクアップで「出席補填」して下さるよう、改めてお願い申し上げます。そして今年度の出席率も「晴れて 90%クリヤーの一年」で終えたいものと思っております。これからの時期、各 RC とも年度末を控え、一年の締めくくり「会長幹事慰労会」等が各クラブで開催されます。この辺の機会もご利用いただき、これまであまりメイクアップされなかった会員諸兄、そして新入会員の方々にも、ぜひともメイクアップをお願い申し上げます。

それから、大変残念で可哀想なご報告がございます。

先週の理事会、そして例会時、幹事からも報告があったかと思いますが、財団奨学生として来年度、スペインで3ヵ月間の「文化研修」にエントリーしておられた現馬場ガバナー事務所職員の五十嵐梨絵さんの希望が、国際RCの「財政上の問題」で却下されてしまいました。ご本人からは既に、「履歴書」や「小論文」等、受験に必要な書類も提出されており、当クラブとして「面接」と「推薦状の作成」を今週中にと、予定していたこの時点での出来事でした。「選考結果」がダメだったのなら、本人も諦めもつくのですが、言わば「門前ばらい」・・・。本人には「時期が悪かった」としか言いようがありません。本当に可哀想な事をしたと思っております。世界同時不況の波は遂に「ロータリーにも・・・」と感じざるを得ない結果でした。

そしてもうひとつ、「愛煙家」の私にとってはあまり嬉しくない話・・・。
毎週例会でお世話になっているここ信金本店さんでの「喫煙」が、今日を以って終わります。説明によると、ここ信金さんは以前から「全館禁煙」とか・・・。例会で当クラブ同様、会場使用させて貰っている三条RCさんは、以前から3Fロビーでも「禁煙」とか・・・。
従って来週から、ロビーの「アヘン窟」も煙と共に消えて無くなります。昔から、大家さんに「店子」は逆らえませんかネ・・・！きっと私たちの健康を気遣っての対応と、「善意」に理解する事にしましょう。今日はあまり景気の良くない話ばかりの会長挨拶でした。

ようこそ タキ君

■山奨学生 タキ・コフィ・アルフォンソ君 《コートジボワール》

■長岡技術科学大学 工学研究科 生物機能工学専攻 修士課程2年

皆さん、こんにちは。今、僕は就活に頑張っています。しかし、昨年来の不況から、いくつもの会社にトライしていますが、まだ内定をもらっていない状況です。

とても悲しい出来事がおきました。お母さんが亡くなりました。2ヶ月前に6年ぶりに帰国でき、その時はお父さんの病気のお見舞いに帰ったのですが、お母さんはとても元気でした。それが突然、病気で亡くなってしまいました。とても悲しくて、毎日寂しい時間を過ごしていました。けれども、ロータリーからいただいている奨学金のお陰で、6年ぶりに、最後に元気な母に会えたのだから・・・と今は思っています。本当にロータリーの皆さんのお陰です。改めてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

幹事報告

荒澤 威彦 副幹事

●馬場ガバナー事務所より

地区ホームページ人材バンクメンバー推薦・登録のお願い

人材バンクコーナー：クラブの優良な会員のピーアールをしていただき、クラブを超えた会員同士の交流や卓話の依頼ができる地区ネットワークを駆使した人材の宝庫になり得るサイト

*各クラブ1~2名の推薦、登録を・・・。

BOXボックス

～・ 5月18日 14,000円 今年度累計 924,894円 ～

- 吉井君 先週の例会は仕事の都合で休んでしまいました。初めての「欠席」、残念でした。佐藤会長エレクトのカバー有難うございました。新型インフルエンザに気をつけましょう。
- 相田君 昭和52年に結婚し、52年が過ぎました。祝いの生花、有難うございました。また、広岡会員の卓話、楽しみにしています。
- 石山君 東京へ出張、関西からも出席者が多く、心配で1日早めて帰って来ました。
- 坂井(範)君 インフルエンザ対応でマスクというマスクが引っ張りだこです。在庫も90%売れました。他の商品も同じだと良いのですが・・・。
- 渡邊(久)君 新インフルエンザの流行忌わしきことです。ご用心下さい。
- 赤塚君、坂本君、田代君、野中君 広岡さん、卓話ご苦労様です。期待しております。
- 安達君、飯山君、鈴木(武)君、田中君 BOXに協力致します。
- 丸山(征)君 新型インフルエンザの為、バーミングラム世界大会がどうなるかと案じています。BOXにご協力有難うございました。



本日、卓話当番の広岡です。よろしくお願いします。皆様に聞いて頂けるような話は、なかなか出てまいりませんので、今日は一冊の本の助けを借りることにしました。

「逝きし世の面影」が本の題名です。

逝くということと、過ぎるということは違います。過ぎるとはただ事実を述べただけですが、逝くという場合は、逝ったものが再び帰らないことを含意します。

また、どんなものについても過ぎると言いますが、逝くという場合は、何かとても大切なもの、かけがえのないものについて言われます。

「逝きし世の面影」

かつてこの国には、或る社会とそこに生きる人々とが存在した。それらのものを、私は深く愛さずにはいられない。しかし、その社会とその人々は滅亡し、永遠に失われて二度と再び戻って来ることはない。失われたものが何だったのか、その面影をたどってみたい。このように著者は言っているわけです。

その面影を再現するために、著者は、異邦人の証言を利用します。当時（幕末から明治にかけての時期ですが）多くの異邦人が来日しました。そこで目の当たりにしたものを、彼等は、驚きの眼をもって書き残さずにはいられませんでした。「何というものが、ここには在るのか」驚きと賞讃の念に駆られて、自ら見聞し、観察したありとあらゆる事物と経験を、夢中になって記録しました。その記録を整理し、積み重ねて、著者は、当時の社会と人々の広範に渡り、細部に及ぶ姿を再現しています。

再現されたものについて、著者は、徒な論評をしようとはしません。ただ、このようなものが、この国に確かに存在したのだということを知って欲しい、これをよく見てもらいたい、そう著者は言うのです。

「逝きし世の面影」

頁を開きますと、第一章から、第十四章まであります。

- 第一章 ある文明の幻影
- 第二章 陽気な人びと
- 第三章 簡素とゆたかさ
- 第四章 親和と礼節
- 第五章 雑多と充溢
- 第六章 労働と身体
- 第七章 自由と身分
- 第八章 裸体と性
- 第九章 女の位相
- 第十章 子どもの樂園
- 第十一章 風景とコスモス
- 第十二章 生類とコスモス
- 第十三章 信仰と祭
- 第十四章 心の垣根

とあります。

第一章は、著者のスタンス、意図、方法について述べられた論述的な章ですが、その冒頭部分を読んでみます。少し長くなりますが、ご容赦下さい。

私はいま、日本近代を主人公とする長い物語の発端に立っている。物語はまず、ひとつの文明の滅亡から始まる。

日本近代が古い日本の制度や文物のいわば蛮勇を振った清算の上に建設されたことは、あらためて注意するまでもない陳腐な常識であるだろう。だがその清算のひとつのユニークな文明の滅亡を意味したことは、その様々な含意もあわせて十分に自覚されているとはいえない。十分どころか、我々はまだ、近代以前の文明

はただ変貌しただけで、おなじ日本という文明が時代の装いを替えて今日も続いていると信じているのではなからうか。つまりすべては、日本文化という持続する実体の変容の過程にすぎないと、おめでたくも錯覚して来たのではあるまいか。

実は、一回かぎりの有機的な個性としての文明が滅んだのだった。それは江戸文明とか徳川文明とか俗称されるもので、18世紀初頭に確立し、19世紀を通じて存続した古い日本の生活様式である。明治期の高名なジャパノロジスト、チェンバレン (Basil Hall Chamberlain 1850~1935) に「あのころ—1750年から1850年ごろ—の社会はなんと風変りな、絵のような社会であったことか」と嘆声を発せしめた特異な文明である。文化は滅びないし、ある民族の特性も滅びはしない。それはただ変容するだけだ。滅びるのは文明である。つまり歴史的個性としての生活総体のありようである。ある特定のコスモロジーと価値観によって支えられ、独自の社会構造と習慣と生活様式を具現化し、それらのありかたが自然や生きものとの関係にも及ぶような、そして食器から装身具・玩具にいたる特有の器具類に反映されるような、そういう生活総体を文明と呼ぶならば、18世紀初頭から19世紀にかけて存続したわれわれの祖先の生活は、たしかに文明の名に値した。

それはいつ死滅したのか。むろんそれは年代を確定できるような問題ではないし、またする必要もない。しかし、その余映は昭和前期においてさえまだかすかに認められたにせよ、明治末期にその滅亡がほぼ確認されたことは確実である。そして、それを教えてくれるのは実は異邦人観察者の著述なのである。日本近代が経験したドラマをどのように叙述するにせよ、それがひとつの文明の扼殺と葬送の上にしか始まらなかったドラマだということは銘記されるべきである。扼殺と葬送が必然であり、進歩でさえあったことを、万人とともに認めてもいい。だが、いったい何が滅びたのか、いや滅ぼされたのかということをも問はずしておいては、ドラマの意味はもとより、その実質さえも問うことができない。

日本近代が前代の文明の滅亡の上のうち立てられたのだという事実を鋭く自覚していたのは、むしろ同時代の異邦人たちである。チェンバレンは1873(明治6)年来日し、1911(明治44)年に最終的に日本を去った人だが、1905年に書いた『日本事物誌』第五版のための「序論」の中で、次のように述べている。「著者は繰り返し言いたい。古い日本は死んで去ってしまった、そしてその代りに若い日本の世の中になったと」。これはたんに、時代は移ったとか、日本は変わったとかいう意味ではない。彼はひとつの文明が死んだと言っているのだ。だからこそ彼は自著『日本事物誌』のことを、古き日本の「墓碑銘」と呼んだのである。「古い日本は死んだのである。亡骸を処理する作法はただ一つ、それを埋葬することである。・・・このさきやかなる本は、いわば、その墓碑銘たらんとするもので、亡くなった人の多くの非凡な美德のみならず、また彼の弱点をも記録するものである」。

日本における近代登山の開拓者ウェストン (Walter Weston 1861~1940) も、1925(大正14)年に出版した『知られざる日本を旅して』の中で次のように書いている。「明日の日本が、外面的な物質的進歩と革新の分野において、今日の日本よりはるかに富んだ、おそらくある点ではよりよい国になるのは確かなことだろう。しかし、昨日の日本がそうであったように、昔のように素朴で絵のように美しい国になることはけっしてあるまい」。「素朴で絵のように美しい国」という陳述は、むろん自然の景観も関わっているだろう。ウェストンは日本アルプスの美の紹介者であるから、たとえば英国の商人クロウ (Arthur H. Crow 生没年不詳) が1881(明治14)年に木曾御嶽に登って、「かつて人の手によって乱されたことのない天外の美」に感銘を受けるとともに、将来いつか、鉄道が観光客を運び巨大なホテルが建つような変貌がこの地を襲うだろうことを思って嘆息したように、いやそのような予測ではなしに既成の事実として、「絵のように美しい」景観の喪失を嘆いた経験がしばしばあったはずだ。だがもちろんのこと、ウェストンの嘆きは景観の喪失にとどまるものではない。風景の中には人間がおり、その生活があった。「素朴で絵のように美しかった」のは何よりもまず、風景のうちに織りなされる生活の意匠であった。その意匠は永遠に滅んだのである。

クロウは木曾の山中で忘れられぬ光景を見た。その須原という村はすでに暮れどきで、村人は「炎天下の労働を終え、子供連れで、ただ一本の通りで世間話にふけり、夕涼みを楽しんでいるところ」だった。道の真中を澄んだ小川が音をたてて流れ、しつらえられた洗い場へ娘たちが「あとからあとから木の桶を持って走って行く。その水を汲んで夕方の浴槽を満たすのである」。子どもたちは自分とおなじ位の大きさの子を背負った女の子も含めて、鬼ごっこに余念がない。「この小さな社会の、一見してわかる人づき合いのよさと幸せな様子」を見てクロウは感動した。これは明治14年のことである。ウェストンが宣教師として最初に日本の地を踏んだのは明治21(1888)年、クロウが須原で見たような生活の情景は当時まだ随所に残っていたに違いない。

チェンバレンやウェストンはむろん、古い日本の死滅をほぼ見届けた時点で右のように書いたのである。だが滅亡の予感、実はそれより遥かに以前、幕末開国期にこの国に訪れた異邦人によっていち早く抱かれていた。たとえばハリス (Townsend Harris 1804~78) が、1856(安政3)年9月4日、下田玉泉寺のアメリカ領事館に「この帝国におけるこれまでで最初の領事旗」を掲げたその日の日記に、「厳粛な反省・・・変化の前兆・・・疑いもなく新しい時代が始まる。あえて問う。日本の真の幸福となるだろうか」としたるのは、まさに予見的な例といってよからう。このときハリスは、日本に上陸して二週間にしかなってなかった。彼はこの国の根本的な変貌を予感してはいたが、喪われるのが何なのか理解していたわけではない。だがその二年後、下田に来泊したイギリスのエルギン使節団の一艦長に対して、彼は「日本人へのあたたかい、

心からの讃辞」を洩らすとともに、「衣食住に関するかぎり完璧にみえるひとつの生存システムを、ヨーロッパ文明とその異質な信条が破壊し、ともかくも初めのうちはそれに替るものを提供しない場合、悲惨と革命の長い過程が間違いなく続くだろうことに愛情にみちた当然の懸念を表明」せずにはおれなかったのである。

ヒュースケン (Henry Heusken 1832~61) は有能な通訳として、ハリスに形影のごとくつき従った人であるが、江戸で幕府有司と通商条約をめぐる交渉が続く 1857 (安政 4) 年 12 月 7 日の日記に、次のように記した。「いまや私がいとしさを覚えはじめている国よ。この進歩はほんとうにお前のための文明なのか。この国人々の質僕な習俗とともに、その飾りけのなさを私は賛美する。この国土のゆたかさを見、いたるところに満ちている子供たちの楽しい笑声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見いだすことができなかつた私は、おお、神よ、この幸福な情景がいまや終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳をもちこもうとしているように思われてならない」。

ヒュースケンはこのとき、すでに 1 年 2 ヶ月の観察期間をもっていたのであるから、けっして単なる旅行者の安っぽい感傷を語ったわけではない。同様に長崎海軍伝習所の教育隊長カッテンディーケ (Huijssen van Kattendijke 1816~66) が 1859 年、帰国に当たって次のように感想を抱いたとき、彼はすでに 2 年余を長崎で過して、この国の生活については十分な知見を蓄えていたのである。「私は心の中でどうか今一度ここに来て、この美しい国を見る幸運にめぐりあいたいものだと思ひそかに希った。しかし同時に私はまた、日本はこれまで実に幸運に恵まれていたが、今度はどれほど多くの災難に出遭うかと思えば、恐ろしさに耐えなかつたゆえに、心も自然に暗くなった」。彼は自分がこの国にもたらそうとしている文明が「日本古来のそれより一層高い」ものであることに確信をもっていた。しかし、それが日本に「果たして一層多くの幸運をもたらすかどうか」という点では、まったく自信をもてなかつたのである。カッテンディーケの率いたオランダ海軍教育隊付の医師ポンペ (Pompe van Meerdervoort 1829~1908) には、日本に対する開国の強要は、十分に調和のとれた政治が行われ国民も満足している国に割りこんで、「社会組織と国家組織との相互関係を一挙に打ちこわすような」行為に見えた。彼は教育隊の帰国後も 1862 (文久 2) 年まで長崎に在留して、開国後の日本人の墮落をその身で経験し、かつ嘆いた人である。

ひとつの文明の崩壊はリュードルフ (Fr. Aug. Luhdorf 生没年不詳) という、1855 (安政 2) 年に下田に来航したプロシャ商船の積荷上乗人によってさえも予想されていた。「日本人は宿命的な第一歩を踏み出した。しかし、ちょうど、自分の家の礎石を一個抜きとったとおなじで、やがては全部の壁石が崩れ落ちることになるだろう。そして日本人はその残骸の下に埋没してしまうであろう」。

異邦人たちが予感し、やがて目撃し証言することになった古き日本の死は、個々の制度や文物や景観の消滅にとどまらぬ、ひとつの全体的関連としての有機的生命、すなわちひとつの個性をもった文明の滅亡であった。これは再度確認しておかねばならぬ肝要な事実である。

このようにして、6 百頁を超える大著は始められますが、その圧倒的な筆力に、思わず心が揺さぶられてしまいました。

第二章から最終章までは、再現されたものの具体的な記述になります。数百年にわたって、外国の影響をほとんど受けることなく培われて来た、純粋な、日本社会と日本人の姿、近代化によって何もかもが変えられてしまう、その直前の姿が、異邦人の実感を伴う詳細な記述によって、生き生きと再現されています。

これは、私たちにとって、古い日本の新しい発見です。「ああ、こんなふうだったのか、夢のようだな、これは確かに喪われたし、これ程のものが失われてしまったのであれば、自分たちには、何が残されているのだろうか」と、暗澹とした気持ちにさせられてしまいました。

最終章の題は、「心の垣根」です。「心の垣根」、一度聞いたら忘れ難いこの言葉の中に、著者の結論的な思いが込められているのだと思います。

当時の人々は、心の垣根が低かった。それ故に、あらゆるものをつながっていた。自分と他人、親子、兄弟、師弟、若者と老人、生ある者と死せる者、さらに身のまわりの植物、動物、風景、自然、ありとあらゆるものをつながっていたわけです。

つながっていた故に、人生の諸々の苦難を生き抜くことが出来たし、どんな人にでも、生きる場所が与えられていました。

つながっていた故に、人々は解放的で、陽気で、くったくがなく、互いに親和し、情愛が深く、礼儀正しく、自由でした。

子供が大切にされ、植物、動物、風景が大切にされ、それらすべての中で、それらすべてに満たされて、幸福でした。人々のそのような満ち足りたあり様を見て、異邦人たちは驚嘆したのでした。

最後に当時の盆行事について記された部分を紹介させて頂きたいと思います。

数日前から準備が始まる。庭木、生垣を刈り整え、庭石を洗い床下まで掃ききよめる。畳もあげて掃除し、天井板、棧、柱、欄間など、すべてお湯で雑巾がかけられる。「家中は屋根の上から床下まできよめられる」のである。仏壇は行事の中心である。当日、爺やは夜が明けぬうち蓮池へ降りてゆく。これは朝日のさし初める光とともに花が開くからである。仏壇には茄子や胡瓜で作った牛馬が供えられ、蓮の葉に野菜が盛られる。女中が「盆燈籠を高々と掲げる」。火を灯すと、中の切紙が小鳥の群れが羽ばたくようにゆれ動く。「どこの子供も同じことで、私もご先祖さまをお迎えするのは何となく心うれしく感じておりましたが、父の亡くなりました後は、身にしみて感慨もふかく、家族一同仏前に集いますと、心もときめくのを覚えるのであります」。お精霊さまは死の国からは白馬に跨って来るといい伝えられていた。

黄昏には一家揃って大門のところで、二列に分かれて精霊を待つ。召使にいたるまで全員新調の着物を着てこうべを垂れる。「街中が暗く静まりかえり、門毎に焚く迎え火ばかり、小さくあかあかと燃えておりました。低く頭をたれていますと、まちわびていた父の魂が身に迫るのを覚え、遙か彼方から、蹄の音がきこえて、白馬が近づいてくるのが判るようでした」。迎え火が消えると仏前へ戻り、「なつかしい客を迎えた喜び」に包まれながらぬかずく。「それからつづく二日は町中がお灯籠で満ち満ちていました。…家の中は心優しい空気に満たされ、わがままな業をする者もなく、笑いさえ嬉しげでした。それも、皆が新調の着物を着、お互いに作法正しく、お精進料理を頂いて楽しみあうことをご先祖さまも喜んでいて下さると思うからでございます」。

精霊が家を去る日は「いいがたい別れの悲しさが胸に迫った。精霊舟を作って、夜の明けぬうち川べりへ行く。「鳥の啼く声のほか、辺りの静けさを破るものはありませんでした。すると、突如として朝日の光が山の端から射し出ました。待ちかまえていた人々の手は一斉に蓆舟をはなちました。…朝日はいよいよ光をまし、山の端までのぼりきる頃、川辺に頭をたれた人々の口からは静かに深い呟きがおこるのでございます。『さようなら、お精霊さま、また来年も御出でなさいませ。おまち申しております』。…母も私も、浄福とでも名付けたい、穏やかさを胸に湛えて川辺を立去りました。「お盆を迎えて以来、にこやかに見えた母の面には、父を見送った後も、以前のような憂わしげな色は戻って参りませんでした。それをみるにつけても、父は、私共のところへ参って慰め、また舟出された今も、私共に平和をのこして行って下さったのだと、しみじみ感じさせられことでした」。

死者は、失われたのではなく、まさしく人々と一緒に生きていたのです。私は去年、母を失いましたが、この度、ここを読み直してみても、盆という行事の意味を理解しました。

失った人々を、もう一度、自分たちのものにするための、喪失の耐え難い悲しみを、耐え得るものにするための、民衆の、必死の知恵だったのだと了解しました。

人生を耐え得るものにするための知恵、この生を、生きるに値するものにするための知恵の集積、それが文明です。(日本民族が、長い間に渡って培って来た) その文明を放棄することで、私たちは、新しい日本を始めたのでした。

最後にもうひとつ、エピソードを紹介して終わらせて頂きたいと思います。

彼はその好例として、英国の詩人エドウィーン・アーノルド (Edwin Arnold 1832~1904) が 1889 (明治 21) 年に来日したとき、歓迎晩餐会で行ったスピーチが、日本の主要新聞の論説でこっぴどく叩かれた話を紹介している。アーノルドは日本を「地上で天国あるいは極楽にもっとも近づいている国だ」と賞讃し、「その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のようにやさしい性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙譲ではあるが卑屈に墮することなく、精巧であるが飾ることもない。これこそ日本を、人生を生甲斐あらしめるほとんどすべてのことにおいて、あらゆる他国より一段と高い地位に置くものである」と述べたのだが、翌朝の各紙の論説は、アーノルドが産業、政治、軍備における日本の進歩にいささかも触れず、もっぱら美術、風景、人々のやさしさと礼儀などを賞めあげたのは、日本に対する一種の軽視であり侮蔑であると憤激したのである。



月信

国際ロータリー第 2560 地区

ROTARY INTERNATIONAL DISTRICT 2560

2008-2009 年度 5月号 Vol.11



2008-09 年度 第 2560 地区クラブ紹介

当クラブは 1962 年に創立、会員数は現在 37 名です。

毎月第一週を夜例会とし「家族親睦お花見例会」や「新蕎麦を楽しむ会」など会員及び家族の親睦をはかっております。クラブ内では「合唱」「ゴルフ」「旅行」などの同好会活動も活発に活動しており、特に 2007-2008 年度の R I 「意義ある業績賞」を頂き、混声合唱クラブの「出前コンサート」は、主に高齢者施設を慰問して大変喜ばれております。

また、北越戊辰史跡の慈眼寺・船岡公園西軍墓地・朝日山古戦場に案内板の設置など 6 年を要して完成に漕ぎつけました。

6 月には、小千谷市民に日頃聴く機会に恵まれないハイレベルの合唱を通じ、音楽の素晴らしさを再認識して頂きたく、中央から男声合唱団コールバフナーを招いてコンサートを開催。同時に市内で活動している 2 つの合唱団と共にわが小千谷ロータリー混声合唱団も出演します。

震災を乗り越えた元気な小千谷 RC を今後もよろしくお願ひします。



小千谷 RC
岡元 学会長



高田 RC
佐藤 憲二会長

高田ロータリークラブは、1955 年 8 月 15 日、県内 5 番目に国際ロータリーから加盟認証され、54 年目を迎えました。当クラブは先輩方が長年築かれた歴史と伝統の上に、名誉と誇りを“ずっしり”と感ずるクラブです。この共通の認識のもとで 82 名の会員がクラブの運営や活動を行うと同時に各メンバーが個人としてそれぞれの社会的立場で、また企業活動を通して、ロータリーの奉仕の理想を念頭において活躍されていることをとても誇りに感じています。

50 周年を 11 月に開催します

クラブ紹介；新潟県南部に位置し霊峰妙高山のふもと、雪解け水にうるおされた肥沃な土地と風光明媚な土地 旧新井市、旧板倉町、旧中郷村をエリアとしています。

今年で設立 50 周年を迎えます。歴史ある当クラブには高邁な先輩を多く輩出し、よき伝統と新しき進取の精神に培われております。

クラブの特色；例会日は毎週水曜日であるが 2 ヶ月に一回の割で夜例会を開き、親睦をはかる目的のほか、夜でなくては聞けない講師を招きうんちくのある卓話を聞く。本年はお酒シリーズとして、ビール、清酒、ワインの専門家より話をしていただき、かつ味わいながらなので非常に有意義であった。

クラブの自慢；長年の奉仕活動を地域社会より理解されている。自慢しないのが自慢である。



新井 RC
和田 知成会長

ゴルフ同好会からのお知らせ

市内 7 クラブゴルフ大会ご案内

日時	2009 年 7 月 4 日 (土) OUT・IN 8:00 スタート
会場	大新潟カントリークラブ 三条コース (TEL 46-3221)
競技方法	個人戦 18 ホールストロークプレイ、ペリア方式 (9ホール隠し)
会費	8,000 円 (参加費 3,000 円 懇親会費 5,000 円)
表彰&懇親会	18:00~ 於：魚長

6月のとよみ

水無月 平成21年

日	月	火	水	木	金	土
	1 ◆南RC 創立記念例会 吉井正孝会長 於:ロイヤル ホテル 12:30~13:30	2 ◆北RC 卓話 石川一昭会員	3 ◆三条RC 卓話 阿部暁義会員	4 ◆東RC クラブ・ フォーラム	5	6
7	8 ◆南RC 卓話 三野輪明人 会員	9 ◆北RC 卓話 吉田文彦会員	10 ◆三条RC クラブ・ フォーラム	11 ◆東RC クラブ・ フォーラム	12	13
14	15 ◆南RC クラブ・ フォーラム 於:ロイヤル ホテル 12:30~13:30	16 ◆北RC クラブ休会 ※記帳できます	17 ◆三条RC 外部卓話 ガレージ1 インストラクター 水品江利子様	18 ◆東RC 「一年を振り返って」 会長・幹事	19	20
21 巻RC 20周年 於: ほたるの館 12:10 ロイヤル 出発	22 ◆南RC クラブ・ フォーラム	23 ◆北RC 「今年度を振り返って」 石川友意会長	24 ◆三条RC 会長幹事 慰労会 ※記帳できます	25 ◆東RC 会長幹事 慰労会 ※記帳できます	26	27
◆————— バーミンガム国際大会 —————◆						
28	29 ◆南RC 会長 幹事・ ガバナー・地区 幹事 慰労会 18:30~ 於: 餞心亭 おゝ乃	30 ◆北RC 会長幹事 慰労会 ※記帳できます				

お知らせ: 南RC 6月1日、15日の例会は会場が三条ロイヤルホテルに変更になります。
お間違えのないようご出席お願い致します。(例会時間は通常通り12:30~13:30)

* 近隣RC例会変更のお知らせ

記帳場所

加茂RC 6月18日(木) 夜例会
分水RC 6月23日(火) 新旧役員交替慰労会
燕RC 6月25日(木) 新旧交替慰労会
吉田RC 6月26日(金) 新旧交替慰労会

加茂産業会館2F
だいえいビジネスサービス
燕三条ワシントンホテル
山岸会計事務所